

阿閉吉男君の『ジンメル社会学の方法』に対する授賞審査要旨

本書は、理論社会学の領域で特にドイツ社会学の研究に専念してきた著者が、形式社会学の提唱によって社会学史上一時期を画したゲオルク・ジンメルを対象として多年研鑽してきた学問的成果をふまえた研究であつて、その意図するところは、彼の社会学の方法をたんに方法論的ではなく、これをその実質的な社会学理論との関連において総合的に再検討し、改めて彼の社会学の特徴やその現代的意義を説明しようとするにある。

著者はこの見地から本書の第一部「ジンメル社会学の基礎」の第一章「ジンメル社会学と哲学」で、まずジンメル社会学の基礎をなした哲学的見解を問題とし、ジンメルが当初カントの影響を受け、その認識論とともに、後年彼の社会学のなかで中心的意義をもつようになった相互作用の概念をも撰取したが、生の哲学に指向するに及んで彼が「生の弁証法」に即した独自の方法的な相対主義の立場を樹立したものとなし、この立場こそやがて彼の社会学方法論において原理的な役割を演ずるようになったものと見ている。

次に著者は第二章「ジンメル社会学方法論の再検討」でジンメル社会学の対象や方法や技法を取扱ったその主要部分のなかで、ジンメルがコントやスペンサー以来の広義の社会の概念を形式と内容との両面に分解し、価値ないし目的としての内容に対して相互作用としての形式をもって狭義の社会の概念と決定し、これによって形式社会学の名において特殊科学としての社会学の成立を基礎付けようとしたその方法論的な論理を、ジンメル自身形式として例示し

た競争その他について具体的に解明し、さらにジンメルにおいては相互作用の概念そのものが個人と社会との対立を越え、実在を離れた機能的なもので見られると同時に、これがまた結合だけでなく斗争をも含んだものと規定されている点に、相対主義の立場が徹底されていることを指摘し、これをもって彼の社会学方法論の最大の特徴をなすものと主張している。著者はなおこの章においてジンメルの社会学体系の形成を歴史的に考察し、彼が中期に提唱した形式社会学の構想が初期から用意されていたこと、および彼が後期になって形式社会学を完成する意味で、一般社会学と哲学的社会学をも包括した体系を提示した契機も、また初期に溯って確認できるとみなしている。

著者はこれに続く第二部「ジンメル社会学の諸相」の第一章「ジンメルの理論」では、ジンメル社会学の体系の中核をなす形式社会学のなかでも後代の社会学理論に大きな影響を及ぼしたものとして、小集団論、支配理論および斗争理論をとりあげ、第二章「小集団論の古典的形態」と第四章「斗争の社会学」ではそれぞれジンメルの見解の独創的な点と併せてその現代社会学への影響を広範に検討し、第三章「支配の社会学」ではジンメルの見解をマックス・ウェーバーのそれと対照して、前者のなかに後者に対する先駆的な要素を発見することができると指摘している。この際著者は特に小集団論や斗争理論をめぐってアメリカやドイツでジンメル社会学への方法論的関心が高まって来ていると見るとともに、今日ジンメル社会学の方法論を有効に問題とするためには、あらかじめ彼の実質的な社会学理論を消化することが不可欠であるとなし、本書の企図をばましくこの路線上の一つの試みとして性格付けている。

ジンメルの社会学は、第一次大戦後ドイツで彼の形式社会学を範とした社会学が盛んになった際、これに対する関心を世界的によびおこし、一時その社会学の对象的規定を中心として方法論的論議が展開されたものであった。しか

し著者は本書でジンメル社会学における方法を再検討するにあたって、かならずしも社会学の对象的規定に焦点を定めず、むしろジンメルが社会の本質を相互作用と規定し、これを説明するために採用した相対主義の立場を実質的な社会学理論との関連において究明することをもって本書の第一義的な目標としている。これは著者が一応社会学の对象的規定に関するかぎり、ジンメルの形式的な社会概念を肯定しているところから由来するものであって、それだけに著者のジンメル社会学の方法に対する考察は、かならずしも十全でなく、部分的に創意の稀薄さを感じさせるものがないではない。

ジンメル方法論における相対主義をあえて原理として重視し、これによって彼の社会学を方法的見地から解明しようとしたものにしても、一九二〇年代にはすでにマムレー (Mamlet) やスパイクマン (Spykman) 等の研究が出ている。しかしこれらの研究は方法的に相対主義に触れているものの、これをジンメルの実質的な社会学理論との関連において、全面的かつ徹底的に究明しようとしたものではない。本書はこれらと対照するとき内容的にははるかに精密であり、たんなる方法論を越えて社会学思想全般にわたっている点で、これを凌駕すると見てよいであろう。

比較的体系的な大著に乏しいジンメルの諸著、述作を丹念に渉猟してその社会学の全体像を現前せしめることも、彼と同時代の社会学者を対比することによって、その方法上の特殊性を浮彫りにしようとしている点等、本書はこれまでやや閑却されてきた観のあるジンメルの研究として評価に値するものと認めることができる。